東洋史研究

第五十三卷 第二號 平成六年九月發行

漢代三老の變化と教化

鷹 取 祐 司

はじめに

一 三老制の制定

二 衆民の師

三 三老と教化政策

(一) 衆民の師から尊年へ

(二) 教化政策

(三) 三老の役割

むすび

はじめに

漢代、郷には嗇夫・游徼と共に三老が郷官として置かれ、地方行政の末端としての役割を擔っていた。ところが、『晉書』職官志には郷に嗇夫があるのみで三老の記載は無く、このことから、三老の存在に漢代の郷里支配における特異性の

一端を見ることが出来る。

『漢書』卷一九上 百官公卿表上には「三老は教化を掌る。畜夫は訟を聽き、賦税を收むるを職とす。游徼は徼循し盜賊を禁ず」とあることから、教化を掌る三老は、他の畜夫、游徼と相互に補完しながら、國家による租税徴収を確保する役割を果たしていたと理解された⁽¹⁾。しかし、この理解は百官公卿表に現れる三老像を漢代全期に一般化しており、時期的變化が考慮されていないという點で問題がある⁽²⁾。さらに、三老制制定當初、三老は郷里の指導的存在である父老の中から選出されたと考えられ、それ故三老は單に租税徴収確保の役割だけではなく、國家權力と郷里社會との接點という機能も果たしていたといえる。この點を重視したのは宇都宮清吉氏であり⁽³⁾、氏は皇帝權を法家的「強權の世界」、郷里社會を父老—子弟關係によって形成される「自律の世界」と性格附け、兩者は本質的に相違するため皇帝權がそのままの形で郷里社會へ侵入することはできず、そのために父老の中から三老という仲介者的職制を設けることによって、初めて國家の郷里社會に對する支配が達成される、と理解する。ここでは、父老が三老の選出母體であることから兩者は同質の存在とされる。しかし、三老は國家によって任命されたポストであつて、父老の如き社會的階層ではない。従つて、三老と父老とを同次元で考えるべきではなく、三老は國家によって様々な位置附けがなされ得る存在である點を認識した上で、郷里社會との關係を考えるべきである。また、三老・父老・屬吏と郷里社會との關係を考える際に、その選出において共通して郷里の推擧が必要であると前提することは⁽⁴⁾、三老理解において大きな問題を含むと考える。

本稿ではかかる問題點を考慮にいたした上で、國家が三老を如何に位置附け、三老に如何なる機能を期待していたかを、時間軸に沿つて見ていくことによって、國家と郷里社會の間に位置する三老の姿を明らかにしたい。

一 三老制の制定

漢王二年二月、天下統一を目指す高祖は三老制を制定した。『漢書』卷一上 高帝紀上には、

民の年五十以上、脩行有り能く衆を帥い善を爲すを擧げて、置きて以て三老と爲す、郷ごとに一人。郷の三老一人を擇び縣の三老と爲し、縣の令丞尉と事を以て相教えしむ。復して繇戍すること勿れ。十月を以て酒肉を賜え。

とある。この時の高祖の勢力範圍は、項羽による十九王國のうち六王國にあたる地域に過ぎず、⁽⁵⁾ 絶對的優位とは言い難く、「蕭何關中の老弱の未だ傳せざる者を發し悉く軍に詣らしむ」という記述から、高祖は兵卒軍糧を徵發する必要に迫られていたことが窺われる。

秦末漢初において、郷里社會の指導的存在であったのは父老であるが、高祖の三老制制定以前にも三老と呼ばれる存在があり、これもまた父老と同様に郷里社會の指導的存在であった。沛の父老が高祖を推戴した如く、陳の三老豪傑が陳涉に王位を勧めている。⁽⁹⁾ また、父老と三老とが互用されている記事もある。⁽¹⁰⁾ 高祖は、兵卒や軍糧を徵發するためにこれら父老・三老の支持を獲得する必要があった。さらに、繼續的徵發を實現するためには、彼らの支持を一時的に獲得するだけではなく、何らかの形で父老を自己勢力内に組織化する必要があった。

このような状況の中で制定された三老制の目的は、當時郷里社會の指導的存在である父老・三老を、その名稱を採った三老制の中に組織化し、それを通じて兵卒軍糧の徵發を可能とすることであったと考えられる。郷の三老の中から縣の三老一人を選び「縣の令丞尉と事を以て相教えし」めているのも、三老の意見を縣統治へ反映させることで、民の背反を防ぎ、支配を安定的に繼續することが意圖されていたものと考えられる。

三老は郷毎に置かれているが、郷とは民の集住地を指す。高祖が法三章を「縣郷邑」に布告していることから、⁽¹¹⁾ 當時の集住地には縣（縣城）と郷と邑があったことが、また、高祖が沛縣の豊邑、陳平が陽武縣の戶牖郷の人であることから、⁽¹²⁾

郷と邑は共に縣に屬する集住地であったことがわかる。『漢書』百官公卿表には縣・道・國・邑と郷と亭の數が記されるが、⁽¹³⁾ そのうち亭は警察・通信・宿泊施設であるから、⁽¹⁴⁾ 縣に屬する集住地は郷である。百官公卿表に記すように漢代、邑は皇太后・皇后・公主の食邑を指し、一般民の集住地を意味しない。従って、應劭が「沛豊邑」に註して「沛は縣なり。豊

は其の郷なり」といふ如く、秦代、郷と邑に區別されていた集住地を、漢では區別無く郷と言つたのである。三老制では郷三老から縣三老が選ばれているが、集住地のうち縣城を除いて郷だけから郷三老を選び、その中から縣三老を選ぶといふのはいかにも不自然であり、縣城を都郷として郷の中に含むと考えるほうが自然である。蒼頡廟碑には衙縣三老と衙郷三老が見えるが、⁽¹⁶⁾縣治である縣城は縣名と同名で呼ばれており、⁽¹⁷⁾また衙には令がいることから衙は縣城である。従つて、衙郷三老とは衙縣の縣治である衙縣城において選ばれた三老であり、縣三老と區別するために郷三老と言つたのである。以上のように考えれば、郷毎に三老を置くとは、縣城と郷を含めた民の集住地毎に三老を置くことをいう。この縣城と郷は城壁で圍まれた集住地であり、⁽¹⁸⁾父老を指導的存在とする郷里社會はこのような集住地を單位に形成された。沛の父老が沛令の殺害と高祖の受け入れをにわかにな決定し、子弟が従つてゐることは、日頃から父老が沛縣城の指導者の機能を果たしてゐたことを物語るものである。以上のことから、三老は所屬する郷里社會を代表する立場であつたといふことができる。

ところで、當時の郷里社會において父老は血縁的長上を指す父兄とも言われ、また、郷里の成員を同じく血縁的な意味を持つ「子弟」「諸母」「里母」といふ語で言うことから、郷里の成員間相互には擬制的血縁關係がかなり強く意識されてゐたといえる。⁽¹⁹⁾「父事」され「兄事」される者である父老の指導力もこの擬制的血縁關係に基づくものであつたらう。このような郷里社會はそれ自身自律的秩序を持つものであつた。『漢書』卷二五上 郊祀志上に、

高祖十年春、有司 縣をして常に春二月及び臘を以て稷を祠るに羊彘を以てし、民の里社は各々自裁して以て祠らしむるを請う。制して曰く可。

とあり、民の里社においては「自裁」が許されてゐた。⁽²¹⁾有司がこれを請うてゐるのは、現實の問題として、父老を中心として執り行われる里社の祭に關し公權力は關與しないほうが便宜だつたためであらう。ここに、父老を中心とした自律的秩序によつて秩序づけられ、公權力の關與を特に必要としない郷里社會の在り方、また、それを公權力の側も認識して干

涉しないという、當時の郷里社會と公權力との接觸形態を窺うことができる。

また、曹參が齊丞相の時、「治の道は清靜を貴び而うして民自ら定まる」という蓋公の言を實行しその結果齊國安集であつたことや、後任の丞相に「齊の獄市を以て寄と爲し、愼んで擾すること勿かれ」と忠告したことは、⁽²³⁾公權力が實現する秩序とは別に郷里社會には自律的秩序が存在し、公權力の側もそれを認め、例外無く公權力によって支配することはなかつたということを示している。

公權力と郷里社會との接觸形態がかかるものであれば、三老は高祖と郷里社會との接點・媒介としての役割を果し、三老の選任も父老・郷里民の推薦する人物を高祖が追認し任命する形であつたと思われる。

二 衆民の師

『漢書』卷四 文帝紀前十二年の詔に、

又曰く。孝悌は天下の大順なり。力田は生を爲すの本なり。三老は衆民の師なり。廉吏は民の表なり。朕甚だ此の二三大夫の行を嘉みす。今、萬家の縣、令に應ずる無しと云う。豈に實に人情ならんや。是れ吏賢を擧ぐるの道未だ備わざればなり。其れ謁者を遣りて三老孝者に帛を勞賜すること人ごとに五匹、悌者力田に二匹、廉吏二百石以上百石率の者に三匹。及び民の便安せざる所を問ひ、而して戸口の率を以て三老孝悌力田の常員を置き、各々をして其の意を率いて以て民を道びかしめよ。

とある。この詔について次の三點を考えてみたい。まず、三老が國家によって「衆民の師」と位置附けられたこと。第二に、三老が孝悌力田と共に民を導くとされていること。第三に、三老制定時には郷毎に一人であつた三老が「戸口の率を以て」常員を置かれていることである。

まず「衆民の師」について。言うまでもなく師とは人の模範となつて人々を導く指導者である。⁽²⁴⁾三老と同様に吏も「民

の師」と位置附けられていることに注目される。文帝の詔では廉吏は「表」だが、「表」も「師」と同意である。⁽²⁶⁾『漢書』卷五六に見える董仲舒の言葉は「民の師師」である吏は民を教訓すべき者であると言うが、⁽²⁷⁾吏は國家支配を實現するものであるから、教訓の内容は當然國家への協力・従屬である。吏と同じく「衆民の師」とされた三老も同様に國家への協力・従屬を民に對して教訓すべきことが期待された。

『漢書』卷五七下 司馬相如傳下には、三老が「教誨せざるの過」を以て譴責されている事例がある。⁽²⁸⁾武帝の時、唐蒙が夜郎等への遣使の際に行った巴蜀における過度の徵發に對し、武帝が相如を遣わして巴蜀の民を諭告した時のことであるが、相如は、巴蜀の民衆が夜郎等への遣使に際する徵發を逃れることは「人臣の節」ではなく「人臣の道を盡くす」ものでもない⁽²⁹⁾と非難している。従って、三老の「教誨せざるの過」とは、國家による徵發に協力して「人臣の節」を果たし「人臣の道を盡くすを樂う」よう民衆を教誨しなかつたことである。この例では、三老は國家による徵發への協力・従屬を民に對し教訓すべきとされていた。

また、武帝期の代田法普及にも三老は關與している。この代田法は大司農の屬官である搜粟都尉の主導の下に推進された國家的事業であるが、三輔内の三老が二千石の命の下、縣令長・力田・父老の善く田つくる者とともに代田法の技術を習得させられている。⁽²⁹⁾民に對する實際の技術指導は篤農家である力田と父老の善く田つくる者が擔當したと思われるが、いずれにしろ三老は代田法を民に紹介・普及させることを掌っていた。武帝の詔でも三老は「民の師」とされてお⁽³⁰⁾り、これらのことが衆民の師と位置附けられた三老に期待されていたことが確認できる。

では、文帝詔の場合はどうか。詔にある「大順」の語は「父子篤く、兄弟睦まじく、夫婦和す」という禮教的な民のあべき姿をい⁽³¹⁾い、「爲生之本」は農業を指す。⁽³²⁾この詔は賈誼や晁錯の上書に見られるように、⁽³³⁾民が利を逐い商業に走る結果、禮儀を忘れ農業から離れるという當時の社會的風潮に對し、民を農業に復歸させ、それによって禮儀をも復興しようという、重農主義政策の一環として出されたものであり、三老孝悌力田が民を導く「意」とは民を農業に歸し禮儀を守ら

せるというこの重農主義政策である。文帝詔において三老は重農主義政策への協力・從屬を民に教訓することが期待されていた。

このように、三老が民に教訓すべきことは、その時々で様々な具體的内容をとるが、要するに國家の政策への協力・從屬である。従って、三老の「衆民の師」とは、進んで國家へ協力・從屬する模範的人臣として民にそれを教訓する者という位置付けである。國家からこのような機能を期待される三老は、地方統治の末端においてその一端を擔っていたといえるであろう。

第二に、三老が孝悌力田と共に民を導くとされていることについて。三老と孝悌力田とは當初別個に設置されたが、文帝詔では三者が並列的に扱われている。孝悌力田は當初から國家による顯彰の對象として設置され⁽³⁴⁾、顯彰を通じて民を感化することにその目的があった。孝悌は父子兄弟間の禮教的秩序を實踐する者、力田は農業に勤める者として顯彰することとで、民を感化しようとしたのである。文帝詔では、三老がこのような孝悌力田と全く同じレベルで民を導くものとされ、孝悌力田と共に帛が賜與されている。このことは、國家が三老と孝悌力田とに民に對して同じ位置付けを與え、三老も孝悌力田の如く顯彰を通じて民を感化することが意圖されていた、ということを示す。

第三に、「戸口の率」を以て常員が置かれていることについて。これはある一定の人口を基準として三老孝悌力田が置かれたことを示す。前述のように三老は最初郷(集住地)毎に置かれたが、それは郷を單位として郷里社會が形成されていたためであろう。「戸口の率」の具體的内容が不明のため郷との關係は明らかではないが、これにより三老が一定人口毎に機械的に置かれることとなり、郷里社會を代表するという性格が以前に比べて希薄になったことは豫想し得る。ただ、後掲『後漢書』傳六六 循吏秦彭傳には郷の三老が、また、蒼頡廟碑と曹全碑には縣と郷の三老が一人ずつ見えるように、郷三老はやはり郷毎に一人置かれており、戸口の率を以て常員を定めたのは一時的な措置であったようである。いづれにしる國家がこのような形で三老の常員を決定し得た點に、國家と三老の關係を窺うことができる。

以上、文帝詔の考察によつて描かれた三老像は、一定の戸口數を基準に機械的に設置され、民に對しては孝悌力田と同様の位置附けがなされ、衆民の師として民に國家への協力・從屬を教訓することが期待されているものであった。百官公卿表では「教化」（後述のように「教化」とは儒家的徳目を民に修得させることを具體的内容とし、以下本稿ではこの意味に限定して使用される）を掌るとされるが、「衆民の師」という位置附けにおいては「教化」との關係は現れてこない。このような三老にも從來と同じく父老が選ばれたのだろうか。『史記』卷一〇四 田叔列傳褚少孫補筆に見える任安の例にそれを考える手掛かりがある。

任安は滎陽の人なり。少くして孤となり貧困なり。人の爲に車を將き長安に之く。留まりて、事えて小吏と爲らんことを求むるも、未だ因縁有らざるなり。因りて名數を占著す。武功は、扶風西界の小邑なり。谷口は蜀の剗道、山に近し。安以爲えらく、武功は小邑、豪無し、高かり易しと。安留まりて、人に代わりて求盜亭父と爲る。後、亭長と爲る。邑中人民俱に獵に出で、任安常に人の爲に麋鹿雉兔を分かち、老小を部署し壯を劇に當て處を易う。衆人皆喜び、曰く。傷つくこと無きなり。任少卿分別平らかにして、智略ありと。明日復た合會す。會する者數百人。任少卿曰く。某子甲何爲ぞ來らざるやと。諸人皆其の見るの疾きを怪しむなり。其の後除せられて三老と爲り、擧げられて親民と爲り、出でて三百石の長と爲り、民を治む。

任安は滎陽から長安へ、さらに武功へと移住して來たいわゆる新參者であり、從來の擬制的血縁關係を基礎とする父老的要素はない。また、任安は武功に來る前貧困であり、三老から三百石長へ轉出の後衛將軍の舍人となった時も貧しかったことから、三老時も貧しかったであろう。それ故、いわゆる豪族的な經濟的規制力や經濟的恩恵の賜與を基礎に指導力を發揮していたとも考え難い。從來郷里社會の指導的存在は父老であったが、武帝期頃には「兼并豪黨之徒、以て郷曲に武斷す」といわれるように豪族が父老と共に郷里の指導的存在となつていた。任安がこれら父老・豪族とは言い難い人物であつたことは、郷里社會の指導的存在が必ずしも三老となるわけではなかつたことを意味する。即ちこれは、三老が漢初

の如く郷里社會を代表するものではもはやなかったことを示唆する。

では、任安は何を以て三老となつたのか。任安は獵などの際に亭長として主導的役割を果たしている。これに對し衆人は「傷つくこと無きなり。任少卿分別平らかにして、智略あり」と評價し、さらに「諸人皆其の見るの疾きを怪し」んでいる。このことから任安は亭長として發揮した指導力によって、郷里民の信頼や尊敬を得、その結果三老となつたのであろう。このことは三老選出の際に、父老・豪族という郷里内における立場が重要なのではなく、郷里民の信頼・尊敬を得て指導力を發揮することこそが重要であつたことを示している。前述のように三老は衆民の師として民に國家への協力・從屬を教訓することを國家から期待されていたのであるから、郷里民に對する強力な指導力の有無が重視されることは當然であらう。

三老が國家への協力・從屬を教訓すべきものであり、且つ任安のように郷里において父老・豪族という立場にはない人物が選ばれていることから、三老の人選は任命權を持つ郡太守が専ら行つていたであろうことが當然豫測される。ところが、従來『後漢書』傳二二 樊宏傳で樊宏の父重が「推されて三老と爲」⁽³⁷⁾つたことを根據として、三老は父老と同様に民の推舉によって選ばれると考えられている。さらに前述のように、郡縣の屬吏も同様であつて父老・三老・屬吏の任用に際し郷里の推舉を必要とする點が共通の性格として指摘されている。しかしこの考え方は、父老・豪族ではない任安が何故三老になり得たのが充分に説明できない。また、三老は官によって任命されるポストであり、社會的存在である父老とは異質のものであるが、選任においてその點が考慮されていないこと、「推」を「民の推舉」と解釋しそれを必要條件とすることにも問題を含むと考える。そこでまず屬吏の場合を取り上げて、民の推舉は必要條件であり、それがなければ任用され得ないのか、について考えることにしたい。

『漢書』卷三四 韓信傳に「推擇せられて吏と爲るを得ず」とあることが、推舉がないと吏となれない例とされる。しかし、民の推舉が吏となる爲の必要條件ではなかった。『後漢書』傳二八 度尙傳に、

度尙 字は博平、山陽湖陸の人なり。家貧しく、學行を修めず。郷里の推擧する所と爲らず。困窮を積み、乃ち宦者同郡の侯覽の爲に田を視、郡の上計吏と爲るを得。郎中に拜せられ、上虞の長に除せらる。

とあるように、度尙は「郷里の推擧する所と爲らず」であつたにもかかわらず、郡の上計吏となり得た。また、『後漢書』傳五七 黨錮范滂傳には、

太守宗資先に其の名を聞き、請いて功曹に署し、政事を委任す。滂 職に在りて、嚴整にして惡を疾む。其の行い孝悌に違ひ、仁義に軌らざる者有らば、皆掃迹斥逐し、與に共に朝せず。異節を顯薦し、幽陋を抽拔す。滂の外甥西平の李頌、公族の子孫にして、郷曲の棄つる所と爲る。中常侍唐衡 頌を以て資に請い、資用て吏と爲す。滂其の人にあらざるを以て、寢めて召さず。

とあり、ここでも「郷曲の棄つる所」である李頌が任用されようとしている。この場合は范滂の拒否によって結局任用されなかつたが、范滂の拒否が無ければ任用されたであらう。⁽³⁸⁾これも郷里の推擧が必要條件ではない例である。

このように屬吏の任用に際しては、民の推擧が必要條件ではなかつた。被任用者の人選は任用權を持つ長吏によって専ら行われるのである。『後漢書』傳七 賈宗傳には、

宗 字は武孺、少くして操行有り、智略多し。初め郎中に拜せられ、稍遷りて、建初中朔方太守と爲る。舊内郡の徙人の邊に在る者、率ね多く貧弱なり、居人の僕役する所と爲り、吏と爲るを得ず。宗其の職に任ずる者を擢用し、邊吏と參選し、轉た相い監司し、以て其の姦を擿發せしむ。或いは功次を以て長吏に補す。故に各おの死を盡くさんことを願う。

とあり、郡太守賈宗が内郡からの徙人を屬吏に任用している。徙人は「居人の僕役する所と爲」っていたわけであるから、郷里の推擧を受けたとは思われず、郷里の推擧とは無關係に郡太守によって任用されている。

では、屬吏の任用は何を基準として行われていたのであろうか。范滂傳では明らかに中常侍唐衡が任命權を持つ太守に

對し推薦したことによって李頌は任用されようとしている。度尙傳では度尙が「宦者同郡の侯覽の爲に田を視」たのち上計吏となつてゐることから、宦者侯覽との接觸が任用される契機となつており、おそらく侯覽の推薦があつたのであらう。従つて、任用權を持つ長吏に對して影響力を持つような人物（侯覽や唐衡）による推薦が大きな要因であることがわかる。また、賈宗傳では郡太守自身が屬吏の任用を行っているが、これは太守自身の人物評價に基くものである。即ち、屬吏の任用においては、任用權を持つ長吏への推薦或いは長吏自身の評價が必要條件であり、郷里の推舉が不可欠なわけではない。それ故、そのような推薦がない場合は屬吏に任用されない。前掲田叔傳で「事えて小吏と爲らんことを求むも、未だ因縁有らざるなり」とあるのや、『漢書』卷七六 韓延壽傳で「卒は本と諸生、延壽の賢なるを聞くも、因りて自ら達する無し、故に代わりて卒たり」とあるのは、推薦などがなれないために屬吏となれなかつた例である。

以上、地方屬吏の任用における「推」を考察した結果、從來考えられてゐるように郷里の推舉が必要條件なのではなく、當然のことながら任用權を持つ長吏への推薦とその評價こそが不可欠なのであつた。それ故、韓信傳の「推擇」は民の推舉ではなく、長吏自身の選擇または長吏への推薦と理解すべきであり、韓信の例を以て屬吏の任用において民の推舉を必要條件と考えることはできない。従つて、三老についても從來言われるように「推」を「民の推舉」と理解する必要は必ずしもなく、むしろここで明らかにした屬吏の場合の「推」と同様に理解すべきである。樊重の例では確かに民の推舉をうけているが、それは任命權を持つ郡太守への推薦と理解すべきであり、この例を以て三老選任において民の推舉を必要條件とすることには同意できない。後掲の趙寬は明らかに長吏の人選によつて三老に任じられており、三老の人選も屬吏の任用と同様に任命權を持つ長吏によつて行われたことを裏附ける。父老でも豪族でもない任安が三老となり得たのも、このように三老の選定任命が専ら郡太守によつて行われていたからとすれば理解できよう。このような三老の選定任命の形は、郷里の人選を官が追認すると考えられた漢初とは、大きく異なるものである。ただ、任安のように郷里民の贊同を得られる人物である必要はあつたであらう。

これまで、文帝の詔を手掛かりとして文帝期以降の三老を考えてきた。その結果、國家によって三老は衆民の師という位置附けがなされ、民に對して國家への協力・從屬を教訓することが期待され、さらに、父老・豪族といった郷里社會における指導者の立場にはない人物でも民に對する指導力があれば郡太守により選定任命されていたことが明らかになった。このような三老は地方統治の末端としての役割を果たしていたといえるものであり、第一章でみた三老制定時の郷里社會を代表する三老とは大きく異なる。ここに郷里社會との關係における三老の質的變化を見ることができよう。

三老のこのような質的變化は郷里社會の中への公權力の浸透がその背景であつたと思われる。前述のように漢初の郷里社會はそれ自身自律的秩序を持ち、公權力の側もそれを認め干渉することはなかつたが、その後、郷里社會の中にも公權力が浸透してくるようになった。高祖の時、民の里社は自裁が許されていたが、後には里社の止雨の祭において吏の参加が規定されてお⁽³⁹⁾り、また、民が私に社を立てることも禁じられた⁽⁴⁰⁾。ここに郷里社會内への公權力の浸透の一例を見ることができよう。また、時間的に少し下る例であるが、地方統治において郡太守が直接民に對して生活指導をしたり⁽⁴¹⁾、父老が郡太守などの手先として協力し地方統治の末端としての役割を擔うようになってきた⁽⁴²⁾。父老の役職化はこれに伴って起つたものであろう。後漢章帝期の「侍廷里父老偁東石券」⁽⁴³⁾には、父老になる資格として資産基準があり、その資産基準を満たさなければ父老になり得ないことが記されている。このことは、「父老」の語が郷里内の指導的存在一般を指すのではなく、郷里社會内における一定の役職を指すこと、即ち、父老が役職化したことを示している。このように公權力が直接郷里社會内に浸透し、役職化した父老が地方統治の末端としての役割を果たすようになったため、公權力と郷里社會との接点としての三老の役割はもはや不必要となり、それ故、國家によって三老は新たに衆民の師と位置附けられ、國家への協力・從屬を民に教訓することが期待されるようになったのであろう。

三 三老と教化政策

(一) 衆民の師から尊年へ

このように三老は「衆民の師」として「能く衆を帥いる」者が選ばれていたが、『後漢書』傳六六 循吏秦彭傳には、

建初元年、山陽太守に遷る。禮を以て人に訓じ、刑罰に任ぜず。儒雅を崇好し、庠序を敦明す。春秋の郷射の毎に、輒ち升降揖讓の儀を修む。乃ち人の爲に四誠を設け、以て六親長幼の禮を定む。教化を遵奉する者有らば、擢じて郷の三老と爲し、常に八月を以て酒肉を致し以て之を勤勉せしむ。吏過咎有らば、罷遣するのみ、恥辱を加えず。百姓懷愛し、欺犯する有る莫し。

とあり、「教化を遵奉する者」を三老に選んでいる。これに對應するように前漢後半期以降、三老が教化に關連する事例が目立つようになる。例を挙げよう。

『漢書』卷八九 循吏黃霸傳には、

是の時、鳳皇神爵數ば郡國に集まり、潁川尤も多し。天子 霸の治行終に長者たるを以て、詔を下して稱揚して曰く。潁川太守霸、詔令を宣布し、百姓化に郷い、孝子弟貞婦順孫日々以て衆多なり。田つくる者畔を讓り、道遺ちたるを拾わず。鰥寡を養視し、貧窮を贍助し、獄或いは八年重罪の囚亡し。吏民教化に郷い、行誼に興り、賢人君子と謂うべし。書に云わざるか、股肱良いかな。其れ爵關内侯、黃金百斤を賜い、中二千石に秩せよ。而して潁川の孝弟、行義有るの民、三老、力田、皆差を以て爵及び帛を賜え。

とあり、三老が孝悌力田他と共に爵・帛を賜與されている。

同卷七六 韓延壽傳には、「民昆弟の相與に田を訟して自言する」者があつたので、延壽は左馮翊として「教化を宣明する能わず、民をして骨肉の争訟有らしむるに至る。既に風化を傷つけ、重ねて賢長吏、奮夫、三老、孝弟をして其の恥を受けしむ」といって政務を見なくなった。そこで「令丞、奮夫、三老も亦皆自繫して罪を待」⁽⁴⁴⁾つた。

『北堂書鈔』卷七五 設官部二七太守中所引『謝承後漢書』には、宋度が長沙太守の時「人多く衣食乏しきを以て、産乳するも擧げ」なかつたので、度は「三老を切讓し、民の子を殺すを禁」⁽⁴⁵⁾じた。また、同卷五三 設官部五廷尉所引『謝承後漢書』には、范延壽が廷尉の時「三男子有りて共に一妻を娶り、四子を生み、後子を分かたん」とした者を處分したが、その際「郡太守、令・長を奏免し、三老を師道無しと切讓」⁽⁴⁶⁾した。宋度と范延壽の例では子殺しと三男一妻が問題とされているが、それらも教化不明と關連するものである⁽⁴⁷⁾。

このように三老が教化に關連して顯彰・譴責されている。これは前述の「衆民の師」という位置付けにおいては見られなかつたことであるが、實は百官公卿表の「三老は教化を掌る」に對應する。従つて、百官公卿表の記述は前漢後半期以降の三老についてのものである。

さらに、『後漢書』紀三 章帝紀元和二年二月條には、

乙丑、帝定陶に耕す。詔に曰く。三老は尊年なり。孝悌は淑行なり。力田は勤勞なり。國家甚だ之を休す。其れ帛を賜うこと人ごとに一匹、農耕に勉率せしめよ。

とあり、三老に對し從來の「衆民の師」に代わり「尊年」という新たな位置付けがなされている。孝悌に對する「淑行」は文字どおり「善い行い」の意であり、文帝詔と比べて孝悌に對する位置付けに大きな變化はなかつた⁽⁴⁸⁾。また、力田の「勤勞」は勤め骨折ることであるが、力田は篤農家で籍田の禮は勸農儀禮であることから、農業に勤めることを意味する。従つて、力田も文帝詔の「爲生之本」と同様の位置付けといえる。では、三老の尊年とは如何なる意であろうか。尊は文字どおり尊ぶの意で、年は齒のことである⁽⁴⁹⁾。即ち尊年とは年齢・齒位を尊ぶこと、長幼の序を尊ぶことの謂である。

これは明らかに文帝詔の「衆民の師」とは異質である。

このように前漢後半期以降になると、三老と教化との関連が見られるようになり、さらに、三老に對する位置付けが「尊年」へと變化し、それに對應するように「教化を遵奉する者」を三老に選んでいる。その一方で、「衆民の師」として行っていた國家への協力・從屬を民に教訓する事例は見られなくなる。このような變化は、三老に對して國家が期待する機能の變化を反映していることは間違いない。この變化の鍵となる教化とは何なのか、節を改めて考察しよう。なお、これら教化と関連して現れる三老は、郡太守や縣令長などとの關係から縣三老であると推測される。従って、以下の考察の對象が一應縣三老に限定されることをこわっておきたい。

(二) 教化政策

三老と共に史料上に現れる「教化」とは具體的には何を指しているのか。前掲黃霸傳では「百姓化に郷」った結果、「孝子弟貞婦順孫日々以て衆多なり。田つくる者道を譲り、道遺ちたるを拾わず」という狀況が現出した。「孝子弟貞婦順孫」とは『禮記』冠義に「故に孝悌忠順の行い立ち、而る后以て人と爲るべし。以て人と爲るべし、而る后以て人を治むべし」とある「孝悌忠順」に通じる。『禮記』では孝悌忠順の行いを修得した人物は人を治める資格があるといっており、儒家の理想とする人物である。また「道遺ちたるを拾わず」とは、民が良く治まっている様子を表す常套句である。従って、教化の目的はこのような孝弟貞順という儒家的徳目を民に修得させ理想的治世を實現することにある。教化の對象が民・百姓であることは、前掲韓延壽傳で「不能宣明教化」の結果「民昆弟の相與に田を訟して自言」したと、『謝承後漢書』の記事でも民の子殺し、三男一妻が教化不明の結果とされていることから明らかであろう。

では、如何なる原理を以て民の教化は行われたのか。『漢書』卷八 宣帝紀地節三年十一月の詔に、

詔に曰く。朕既に不逮、民を導くこと不明、反側して晨に興き、萬方を念慮し、元元を忘れず。唯だ先帝の聖徳を蓋か

しむるを恐る。故に並びに賢良方正を擧げ以て萬姓に親しむこと、歴載して茲に臻る。然り而して俗化闕く。傳に曰く、孝弟なる者は、其れ仁を爲すの本か。其れ郡國をして孝弟、行義有り郷里に聞こゆる者各々一人を擧げしめよ。

とあり、また同四年二月の詔に、

詔に曰く。民を導くに孝を以てすれば、則ち天下順う。今百姓或いは衰經凶災に遭い、而るに吏繇事し、葬るを得ざらしめ、孝子の心を傷つく。朕甚だ之を憐れむ。今自り諸の大父母、父母の喪有る者繇事することなく、收斂送終し、其の子の道を盡くすを得しめよ。

とあるように、孝悌・孝が教化の原理であった。地方統治においても孝悌が民の教化原理として現れる。『初學記』卷四歳時部下五月五日所引『謝承後漢書』に、

陳臨 蒼梧太守と爲り、誠を推して理め、人を導くに孝悌を以てす。

とあり、郷里でも『漢書』卷七 昭帝紀元鳳元年三月條に、

三月、郡國の選ぶ所の行義有る者涿郡の韓福等五人に帛を賜うこと、人ごとに五十匹、遣りて歸らしむ。詔に曰く。朕閔勞するに官職の事を以てす。其れ務めて孝弟を修め以て郷里に教えよ。郡縣をして常に正月を以て羊酒を賜い、不幸有る者は衣被一襲を賜い、祠るに中牢を以てせしめよ。

とあるように同様であった。このように民の教化は孝悌がその原理であるが、實際は『孝經』を用いて民を教化した。⁽⁵⁰⁾

『後漢書』傳六六 循吏仇覽傳註所引『謝承後漢書』に、

覽 縣の陽遂の亭長と爲り、教化を行うを好む。人羊元凶惡にして不孝、其の母 覽に詣りて元を言う。覽 元を呼び、元を誚責するに子の道を以てし、一卷の孝經を與え、之を誦讀せしむ。

とあるように、亭長仇覽は不孝の子羊元を教化する際に『孝經』を用いている。⁽⁵¹⁾

昭帝以降、皇帝は皆『孝經』に通じており、⁽⁵²⁾ 制度的にも學官において『孝經』の講義が行われ、⁽⁵²⁾ 王莽の時には正式に

「孝經の師」が立てられている。⁽⁵³⁾さらに、孝廉の察舉を受ける爲には『孝經』が必修の教養となされ、⁽⁵⁴⁾ 期門羽林の士や郡縣の屬吏も『孝經』を學ぶようになる。⁽⁵⁵⁾そして民に對しても教化のテキストとして『孝經』が利用されたのである。昭帝以後の天子が『孝經』に通じ、それに伴うように教化の原理として孝悌が詔に現れてくることから、『孝經』による教化は昭帝頃から始まったようである。ただ『漢書』卷六 武帝紀元朔五年六月の詔「蓋し聞く。民を導くに禮を以てし、之を風するに樂を以てす」は、『孝經』廣要道章「風を移し俗を易うるは樂より善きは莫し。上を安じ民を治むるは禮より善きは莫し」にいう禮樂による統治に通じるものであり、また、同元封五年三月條に「高祖を明堂に祠り、以て上帝に配し、因りて諸侯王列侯を朝し、郡國の計を受く」とあるのは、『孝經』聖治章「昔者、周公后稷を郊祀し以て天に配し、文王を明堂に宗祀し以て上帝に配す。是を以て四海の内各おの其の職を以て來り祭る」とあるのに依つたものである。⁽⁵⁶⁾恐らくは武帝期から既に『孝經』の理念が政策に反映され始めていたのであろう。

このように孝悌は『孝經』によって民に對し教化されたのであるが、それは郷飲酒禮において修得されるものとされてきた。『孝經』廣至德章には「子曰く。君子の教うるに孝を以てするや、家いえに至りて日々に之を見ずに非ざるなり」という『禮記』郷飲酒義の句を引いているが、『禮記』郷飲酒義には、

郷飲酒の禮、六十の者は坐し、五十の者は立ちて侍し、以て政役を聽くは、長を尊ぶを明らかにする所以なり。六十の者は三豆、七十の者は四豆、八十の者は五豆、九十の者は六豆なるは、老を養うを明らかにする所以なり。民尊長養老を知りて、而る后乃ち能く入りて孝弟なり。民入りて孝弟出でて尊長養老、而る后教を成す。教を成し而る後國安かるべきなり。君子の所謂孝なる者は、家いえに至りて日々に之を見ずに非ざるなり。諸を郷射に合わせ之を郷飲酒の禮に教え、而して孝弟の行立つ。

とあり、孝悌は個々の家においてではなく、尊長養老を明らかにする郷飲酒禮において修得されるという。その郷飲酒禮は『白虎通』郷射に、

十月、郷飲酒の禮を行ふ所以は何ぞや。尊卑長幼の義を復する所なり。春夏事急なり、井を浚い牆を次ぐに、子 父を使い、弟 兄を使うこと有るに至る。故に事閑暇なるを以て長幼の序を復するなり。

とあつて、『禮記』に見えた尊長養老のうちでも、特に「尊卑長幼の義」「長幼の序」を復す、すなわち齒位を正すことが儀禮の中心とされていた。⁽⁵⁷⁾ なお「子 父を使い、弟 兄を使う」のが「長幼の義を復す」以前の狀態であるから、この長幼の義は父子兄弟間の秩序である孝・悌をも含むものである。ここに尊年という三老の新たな位置付けと教化との接點が見出される。

では、このような教化は『漢書』百官公卿表の如く三老によって行われているのだろうか。前掲の學官、孝廉、期門羽林、屬吏の例では官によって行われているが、吏がその主な對象であつたからである。しかし、民を對象とする仇覽の例でも亭長である仇覽が行っている。また、平帝の時、庠序に孝經師が置かれたが、『白虎通』辟雍には「故に庠序を立て以て之を導くなり。民に教うる者皆里中の老にして、道德有る者右師と爲し、里中の子弟に教うるに道藝孝悌行義を以てす」とあるように「里中の老」の「道德有る者」が子弟の教化を行うことになっている。また『漢書』卷七六 韓延壽傳には「又正・五長を置き、相率いるに孝弟を以てし、姦人を舍すを得ざらしむ」とあり、孝悌による民の教化が郡太守の指示により正・五長によって行われている。韓延壽傳にはまた「教うるに禮讓を以てするに、百姓の從わざるを恐れ、乃ち郡中の長老の郷里の信向する所と爲る者數十人を歴召し、酒を設け食を具え、親から與に相對し、接するに禮意を以てし」とある。また同卷八九 循吏黃霸傳には「然る後條教を爲り、父老師帥伍長を置いて、之を民間に班行せしめ」とある。韓延壽の例の後者と黃霸の例は『孝經』による教化そのものではないが、太守が民を教訓する際に三老ではなく長老・父老が媒介となつていること、正・五長による教化や庠序の例と同様である。このように現實の教化には官吏或いは里中の老・長老などが携わり、三老の姿は見えてこない。

さらに、三老の職責として『續漢書』百官志五に「三老は教化を掌る。凡そ孝子順孫、貞女義婦、財を讓り患を救う、

及び學士の民の法式と爲る者有らば、皆其の門を扁表し、以て善行を興す」とあるように、民の善行有る者等の顯彰が含まれている。しかし、管見の限り三老が獨自に善行有る者の顯彰を行っている例は見當らない。『漢書』卷七六 韓延壽傳と、『後漢紀』卷一八 順帝紀上永建四年條の朱寵の記事では、ともに郡太守である韓延壽と朱寵自身によって、『後漢書』傳三三 何敞傳では、郡太守何敞の命を受けた「儒術大吏」によって、『後漢紀』卷三三 靈帝紀上建寧二年條の仇香の記事では縣によって、『西京雜記』の顧翽の記事では郡縣によってそれぞれ顯彰が行われているのである。

しかし、民の教化に際して三老が全く關與しなかったわけではない。『北堂書鈔』卷七五 設官部二七太守中所引『謝承後漢書』には膠東相吳祐の事績として「民 詞訟有らば、先に三老をして孝悌を以て諭解せしめ、祐身づから閭里に至り之を和す」とあり、三老が當事者を諭し和解させようとしている。しかしながら、これはあくまで膠東相吳祐の指示によるもので、三老が主體的に教化しているとはいえない。第三章第一節で挙げた黃霸の例でも、あくまでも郡太守黃霸への賞賜に附隨して三老への賞賜が行われており、また三老が教化不明を以て譴責されている他の例においても、同様に三老に積極的、主體的な教化への關與を見ることはできない。

このように、民の善行有る者等の顯彰は三老の職掌と明記されているながら、實際には郡縣の吏によって行われ三老は現れてこない。では、三老は教化政策において一體如何なる役割を果たしていたのであろうか。

(二) 三老の役割

三老が教化政策に關與する機會の一つとして、郡太守による春の行縣を擧げることができる。『續漢書』百官志によれば、郡太守は春に管轄下の縣を巡回し、民に對し農業の獎勵などを行っているが、⁽⁶³⁾その際に各縣の亭傳において民に對し經書の講義や教化を實施している。『後漢書』傳一五 劉寬傳には、

延熹八年、徵せられて尙書令を拜し、南陽太守に遷る。……(中略)……縣を行りて亭傳に止息する毎に、輒ち學官

祭酒及び處士諸生を引き、經を執り對講せしむ。父老を見、慰むるに農里の言を以てし、少年は勉ましむるに孝悌の訓を以てす。人徳に感じて行興り、日々化する所あり。

とあるように、春の行縣の際、亭傳において、經書を講義し、併せて父老・少年を教化している。恐らくは『孝經』もその際に對して講義されたのであろう。同記事が『後漢紀』卷二五 靈帝紀下中平二年條には「縣を行るに三老、學生をして自ら隨わしめ、亭傳に到らば輒ち復た講論す。教化流行し、嚴ならずして治まる」とあることから、三老も太守の行縣に同行していたことがわかる。また、『後漢紀』第一八 順帝紀上永建四年條にも、

朱寵 字は仲威、京兆杜陵の人なり。初め潁川太守と爲り、孝悌儒義を表し、冤獄を理め、孤老を撫し、功曹・主簿皆明經の高行有る者を選ぶ。出でて縣を行る毎に、文學祭酒をして經書を佩びて前驅せしめ、亭傳に頓止すれば、輒ち復た教授す。阡陌を周旋し、農桑を觀課し、吏其の政に安じ、民其の禮を愛す。至る所の縣界、父老の迎うる者常に數千人、寵乃ち三老をして車を御し、人に得失を問わしむ。百姓翕然として、治甚だ聲有り。

とあり、やはり行縣の際亭傳にて經書の講義を行っているが、それに三老が参加している。

しかし、太守の春の行縣は年に一度きりのことであり、民に對する教化としての實効性は甚だ疑わしい。また、朱寵の記事には太守行縣に際して「至る所の縣界、父老の迎うる者常に數千人」とあるように、到着地の縣ではかなり盛大に出迎えをしている。『漢書』卷八九 循吏文翁傳には同じく行縣に際し「縣邑の吏民見て之を榮とす」とあることからも、この太守行縣は民に對して太守の威儀を誇示するためのもので、多分にデモンストレーション的である。

亭傳において經書の講義をするのは、前掲の例では「學官祭酒」「處士諸生」「文學祭酒」などである。太守の行縣であるから、これらは郡學の官と學生であろう。郡文學と文學祭酒にはいわゆる明經の人物が任じられており、經書の講義は彼等が擔當したと思われる。三老は朱寵傳の如く太守行縣において太守の車の御者を務めている。三老による御者の例は、『北堂書鈔』卷七五 設官部二七太守中所引『謝承後漢書』に、

刁曜 魯の相に遷る。縣を行るに、三老をして轡を執り車を御せしめ、頓する所の亭傳、輒ち經書を講ず。⁽⁶⁶⁾

とあり、刁曜の場合にも見られ、三老が太守行縣の際に御者を務めることはそれほど特異な例ではなかった。秩二千石の太守は地方官の最高位であるから、太守の御者はたいへん名譽ある役割であったと思われる。さらに、太守行縣が太守の威儀を誇示するデモンストレーションであるとすれば、民の目にはなおさら名譽なこととして映ったことであろう。その御者を三老は務めており、三老は太守行縣において多分に名譽職的な役割を果たしていたと考えられる。

次には、實際に三老となった人物を取り上げてみたい。まず三老の典型例とされる樊重である。『後漢書』傳二二 樊宏傳には、

父重、字は君雲。世よ農稼を善くし、貨殖を好む。重 性は溫厚、法度有り、三世共財し、子孫朝夕禮敬あること、常に公家の若し。其の産業を管理するに、物として棄つる所無く、童隸を課役するに、各々其の宜しきを得。故に能く上下力を勤せ、財利歳ごとに倍し、乃ち田土三百餘頃を開墾するに至る。……(中略)……貨巨萬に至り、宗族に振贍し、恩郷閭に加う。外孫何氏兄弟財を争い、重之を恥じ、田二頃を以て其の忿訟を解す。縣中稱美し、推して三老と爲す。歳八十餘にして終る。

とあるように、樊重が三老となったのは、外孫何氏兄弟の争いを和解し、それが縣中で賞賛されたためである。兄弟で財を争うことは教化不明が原因であり、⁽⁶⁷⁾これを自分の田を以て解した樊重はまさに「教化を遵奉する者」に當たる。樊重は、これまで考察した如く「教化を遵奉する者」として推薦され三老に任命されたのであろう。

次には武帝末頃の王賀の例を取り上げたい。『漢書』卷九八 元后傳に、

文景の間、安の孫遂、字伯紀、東平陵に處る。賀を生む。字は翁孺。武帝の繡衣御史と爲り、魏郡の羣盜堅盧等の黨與を逐捕す。及び吏の畏懦し逗遛して當に坐すべき者、翁孺皆縱して誅せず。……(中略)……翁孺奉使不稱を以て免ぜらる。嘆じて曰く。吾聞くならく、千人を活かすもの子孫を封ぜらるる有りと。吾の活かす所の者萬餘人、後世

其れ興らんか。翁孺既に免ぜられ、東平陵の終氏と怨を爲し、乃ち魏郡元城委粟里に徙り、三老と爲る。魏郡の人之を徳とす。

とあり、王賀は武帝の繡衣御史として魏郡の群盜を逐捕した。その際、連坐の者萬餘人を罪せず許しているのであるが、他の繡衣御史は皆連坐する者を盡く罪しており、王賀のこのような行爲は許された萬餘人をはじめ魏郡の人々にとって大きな徳であつたろう。「魏郡の人之を徳とす」とはまさにこのことを指していると思われ(69)。その後、魏郡元城委粟里に移り三老となるのであるが、東平陵の終氏との怨を理由に移住したのであるから、「教化を遵奉する者」を以て三老に任じられたとは考え難い。恐らく繡衣御史としての徳を以て任じられたのであろう。

最後に、趙寬碑に見える趙寬を取り上げたい(70)。

孟元の子、名は寬、字伯然は、即ち充國の孫なり。上邽自り別れて破羌に徙る。護羌校尉假司馬と爲り、第五に戦鬪し大軍敗績す。時に于いて四子の孟長、仲寶、叔寶、皆竝に震没し、唯だ寬のみ存す。鋒刃を冒突して、尸死を收葬す。郡縣は殘破し、吏民は流散す。乃ち徙りて馮翊に家し、典藝を脩習す。既にして詩書に敦く、禮樂に悅志し、由お復た篇籍を研機し、史略に博貫す。六體を影篆し、前人に稽呈し、吟咏 章を成し、彈翰 法を爲す。楊・賈・斑・杜と雖も、過ぐるもの或らざるなり。是を以て休聲は遠近に播く。永建六年、西して郷里に歸る。太守陰嵩は、功懿を貪嘉し、召して督郵に署するも、疾と辭して遜退す。徙りて浩登に占す。時に長の蘭芳は、寬の宿徳を以て、端首に謁請し、優して三老と號し、師として臣とせず。是に於て乃ち訟を聽き怨を理め、後生を教誨すること、百有餘人、皆俊艾と成り、仕えて州府に入る。當に福報を膺け、克く前緒を述ぶべきも、時の凝滯に遭い、爵壽を永くせず。年六十五、元嘉二年を以て疾に徂ぎ、二月己酉卒す。

趙寬は、破羌から左馮翊へ移り、そこで學問を修め高い名聲を得た後、再び破羌に歸り、そこで太守によって督郵に署せられようとした。督郵は功曹と共に郡の極位と稱され(71)、屬吏の最高位である。それ故、「五經に兼通し、魯詩尙書を以て

教授し、當世の明儒⁽⁷²⁾であつた魯丕⁽⁷³⁾や、「能く春秋左氏に通じ、因りて百家羣言を覽、遂に英賢と交結し、京師の大人威之を器異と」した馬巖⁽⁷³⁾といった、いわゆる明儒なる人物が任用されている。趙寬も同様に學者としての名聲を以て督郵に任じられようとしたのであろう。趙寬はそれを斷り浩臺へ移ったが、ここでもまた縣長が「端首に謁請し、優して三老と號し」ている。端首とは始めの謂であるから、太守陰嵩が屬吏の最高位である督郵に署せうとしたのと同様に、縣長も趙寬が名聲高き學者であつたのでこれを屬吏の最高位に迎えようとしたのであろう。「優」とは本來の範圍を越えた特別の優遇を意味する。⁽⁷⁴⁾三老の正式な任命權は郡太守にあるので、縣長には三老任命の權限はなく、それ故、特別に三老と號し、縣三老と同待遇を以てこれを優遇したのであろう。このように趙寬は名聲高き學者を以て三老に迎えられたと考へられる。さらに「師として臣とせず」とあるように縣長によって師と仰がれており、甚だ名譽ある地位として扱われていた。先の太守行縣の際の名譽職的役割とも共通し、一般に三老が名譽ある地位として扱われていたことがわかる。また、趙寬は「訟を聽き怨を理め」ており縣政に關與している。なお、趙寬は「後生」を教誨しているが、これら「後生」は「皆俊艾と成り、仕えて州府に入る」とあるように、官吏となる目的で趙寬の下に教誨を受けていたのであり、この「後生」が民一般を指さないことは明らかである。したがって、この「教誨後生」は教化政策における民の教化のことではない。

以上、實際に三老となつた樊重、王賀、趙寬の例を見てきたが、必ずしも實際に「教化を遵奉する者」が三老に選ばれているわけではない。従つて、三老に「教化を遵奉する者」を選ぶということは、實際の教化遵奉というのではなく、その人物を「教化を遵奉する者」という名目で三老に選ぶということを意味する。また、理由は異なるが「縣中稱美」「魏郡の人之を徳とす」「休聲は遠近に播く」とある如く、三老に任じられた郡において相當の名聲を得ていることがこの三人に共通することは注目に値する。

ここで、前漢後半期以降の三老と教化について、これまでの考察の結果をもう一度まとめておこう。

一、「教化を遵奉する者」という名目を以て三老は選ばれている。

二、民の教化の指導原理は孝悌であるが、孝悌を修得する場である郷飲酒禮は長幼の序を復す、すなわち齒位を正すための儀禮とされている。

三、三老には「尊年」即ち齒位を尊ぶという位置附けがなされている。

四、三老は教化をその職掌としながら、民の教化は地方官吏によって行われており、三老が教化へ主體的に關與する例は見られず、民の教化に關連する顯彰・譴責の對象として現れてくる。

五、デモンストレーション的要素の強い太守行縣に際して、三老は太守の御者という名譽職的役割を果たし、また縣長から師と仰がれ、一般に名譽ある地位として扱われている。

六、三老にはその地域で相當の名譽を得た者が實際には選ばれている。

以上のように、齒位を正すことを目的とする教化政策において、三老は「教化を遵奉する者」を名目として選ばれ、「尊年」即ち齒位を尊ぶという位置附けが與えられ、官によって名譽ある地位として扱われていた。しかし、現實には民の教化への主體的關與は見られず、三老は國家から教化政策における具體的な教化の實施を期待されていなかったようである。それにもかかわらず顯彰や譴責の對象となっていることは、三老に對する顯彰・譴責が、三老が教化政策實施に際して果たした實績に對して行われ、それによって三老による教化の實施を促進させることを目的とするのではなく、三老の顯彰・譴責自體に、即ち三老の顯彰・譴責を民に對し示すことそのものに目的があったことを意味する。さらに、三老に必ずしも「教化を遵奉する者」が選ばれているとは限らず、その郡において名譽高き者が選ばれていることも、三老という名譽ある地位へ任ずることが、實際に教化を遵奉した者を顯彰する目的ではなく、やはり、三老という名譽ある地位につけ顯彰することそれ自體に、さらには三老の顯彰を通じて民を感化することに目的があったことを意味する。このように、三老は尊年として高い地位に置かれ顯彰・譴責の對象となること自體にその存在意義があったことから、三老は

教化政策における象徴的存在と結論することができらる。名聲高き者を三老に任用しているのは、象徴的存在として最適の人物であったからであろう。

文帝期以降「衆民の師」として國家への協力・從屬を民に教訓することを國家から期待されていた三老が、教化政策の實施に伴い「尊年」として教化政策の象徴として民を感化することを期待されるように變化した。これに伴い、郡内の名聲高き者が三老に選ばれるようになったのである。

む す び

以上の考察の結果をまとめると次のようになる。高祖によって繼續的支配の實現を目的として設置された三老は、郷里社會を代表する者として郷里社會と國家との接点という機能を果たした。やがて、公權力が郷里社會内へ浸透するに伴い、接点としての三老の必要性は無くなり、文帝期以降、「衆民の師」として國家への協力・從屬を民に教訓することが期待された。この時、三老には父老・豪族といった郷里社會の指導的存在とはいえない者も選ばれており、郷里社會の代表から地方統治の末端を擔うものへと三老の質的變化を見ることができ。前漢後半期以降、教化政策の實施に伴い、専ら「尊年」として民を教化することが期待されることとなったが、實際には教化政策の象徴的存在としての役割を果たしており、三老には名聲高き人物が選ばれるようになった。

さて、三老が教化政策において果たした象徴的存在という役割は、三老五更の養老儀禮において、三老五更が果たした役割と類似する。三老五更の養老儀禮は、天子が三老五更を養うことを通じて天下に孝悌を示すことを目的とする、天子によるデモンストレーションであるが、これまで考察してきた教化政策の一環をなすものである。この中で三老五更は単に天子によって養われる対象としてのみ存在する象徴的存在である。この三老五更には博學高德の舊儒が選ばれており、名聲高き學者として三老に選ばれた趙寛とまさに類似する。それ故、孝悌を民に教える教化政策の中で、中央では養老儀

禮において三老五更が、地方では養老儀禮と同時に郡縣で行われる郷飲酒禮において三老が、共に教化の象徴的存在として同様の役割を果たしていたのではないだろうか。即ち、養老儀禮において三老五更が天子によって父事兄事されるのと同様に、郷飲酒禮において三老は父事兄事される対象であったのではないか。その意味で郷飲酒禮こそが三老の象徴的存在としての役割を最も端的に發揮する場であったのではないだろうか。この点については次の課題としたい。

註

- (1) 鎌田重雄「郷官」(一九六二年初出、同氏著『秦漢政治制度の研究』日本學術振興會 所收)。
- (2) 櫻井芳朗「漢代の三老について」(加藤博士還曆記念論文集刊行會編『加藤博士還曆記念東洋史集説』富山房 一九四一年)は三老の時期的變化について指摘している。
- (3) 宇都宮清吉「古代中世史把握のための一視角」(一九七〇年初出、同氏著『中國古代中世史研究』創文社 所收)。
- (4) 五井直弘「後漢王朝と豪族」(岩波講座「世界歴史」四 古代四 一九七〇年)、重近啓樹「前漢の國家と地方政治——宣帝期を中心として——」(『駿臺史學』四四 一九七八年)。その他の三老に關する先行研究として、嚴耕望『中國地方行政制度史』上編卷上 秦漢地方行政制度 第六章 鄉官(中央研究院歷史語言研究所 一九六一年)、渡部武「秦漢三老制度覺書」(早稻田大學古代研究會『古代研究』三 一九七二年)などがある。
- (5) 『漢書』卷一三 異姓諸侯王表によれば、この時点で項羽の十九王國で高祖の勢力下にあったのは漢、塞、翟、韓、河南、雍の一部(隴西、北地)である。
- (6) 『漢書』卷一上 高帝紀上漢王二年五月條。
- (7) 守屋美都雄「父老」(一九五五年初出、同氏著『中國古代の家族と國家』東洋史研究會 所收)。
- (8) 『漢書』卷一上 高帝紀上秦二世元年九月條「於是、樊噲從高祖來。沛令後悔、恐其有變、乃閉城城守、欲誅蕭曹。蕭曹恐、踰城保高祖。高祖乃書帛射城上、與沛父老曰、天下同苦秦久矣。今父老雖爲沛令守、諸侯並起、今屠沛。沛令共誅令、擇可立立之、以應諸侯、即室家完。不然、父子俱屠、無爲也。父老乃帥子弟共殺沛令、開城門迎高祖、欲以爲沛令。……(中略)……高祖數讓、衆莫肯爲。高祖乃立爲沛公」。
- (9) 『史記』卷四八 陳涉世家「數日、號令召三老豪傑與皆來會計事。三老豪傑皆曰、將軍身被堅執銳、伐無道、誅暴秦、復立楚國之社稷。功宜爲王。陳涉乃立爲王、號爲張楚」。
- (10) 註(9)所引『史記』卷四八 陳涉世家の「三老豪傑」を『史記』卷八九 張耳陳餘列傳では「豪傑父老」に作る。
- (11) 『漢書』卷一上 高帝紀上漢王元年十一月條「乃使人與秦

吏行至縣鄉邑告諭之」。

(12) 『漢書』卷一上 高帝紀上、同卷四〇 陳平傳。

(13) 『漢書』卷一九上 百官公卿表上「列侯所食縣曰國、皇太后、皇后、公主所食曰邑、有蠻夷曰道。凡縣、道、國、邑千五百八十七、鄉六千六百二十二、亭二萬九千六百三十五」。

(14) 日比野丈夫「郷亭里についての研究」(一九五五年初出、同氏著『中國歴史地理研究』同朋舎・出版部 所收)、また『續漢書』百官志五註「漢官儀曰……(中略)……亭長課徵巡。尉・游徼・亭長皆習設備五兵。……(中略)……設十里一亭、亭長、亭候。五里一郵、郵間相去二里半、司姦盜。亭長持二尺板以劾賊、索繩以收執賊。風俗通曰。漢家因秦、大率十里一亭。亭、留也。蓋行旅宿會之所館」。

(15) 『漢書』卷一上 高帝紀上註。

(16) 王昶『金石萃編』卷一〇。

(17) 『漢書』卷一上 高帝紀上で、沛城は沛令のいた縣治であり、縣名と同じく沛と呼ばれている。

(18) 嚴耕望前掲註(4)書 第一章 統治政策與行政區劃、宮崎市定「中國における聚落形態の變遷について——邑・國と郷・亭と村とに對する考察——」(一九五七年初出、『宮崎市定全集』三 古代 岩波書店 所收)。宮崎氏は縣・郷・亭は共に城郭都市でただその規模を異にするだけであるとするが、重近啓樹「秦漢の郷里制をめぐる諸問題」(『歴史評論』四〇三 一九八三年)が批判するように、亭は集住地ではない。

(19) 宇都宮清吉「漢代における家族と豪族」(一九三九年初

出、同氏著『漢代社會經濟史研究』弘文堂 所收)。

(20) 守屋美都雄前掲「父老」。

(21) 註には「師古曰、隨其祠具之豐儉也」とあるが、補注に「沈欽韓曰、祭法、大夫以下成羣立社。注云、大夫不得特立社、與民族居百家以上、則共立一社。今時里社是也。又有二十五家爲社、則書社是也。各自逐便置社耳、顏注非」とあるに依る。

(22) 『漢書』卷四〇 陳平傳「里中社、不爲宰、分肉甚均。里父老曰、善、陳孺子之爲宰。平曰、嗟乎、使不得宰天下、亦如此肉矣」。

(23) 『漢書』卷三九 曹參傳「既見蓋公、蓋公爲言治道貴清靜而民自定、推此類具言之。參於是避正堂、舍蓋公焉。其治要用黃老術、故相齊九年、齊國安集、大稱賢相。……(中略)……參去、屬其後相曰、以齊獄市爲寄、慎勿擾也」。

(24) 『禮記』文王世子「師也者、教之以事而喻諸德者也」、『漢書』卷一九上 百官公卿表上應劭註「師者、長也」、『法言』學行「師者、人之模範」。

(25) 『漢書』卷五 景帝紀中元六年五月條「詔曰、夫吏者、民之師也」。

(26) 『史記』卷一三〇 太史公自序「國有賢相良將、民之師表也」。

(27) 『漢書』卷五六 董仲舒傳「今之郡守縣令、民之師帥、所使承流而宣化也。故師帥不賢、則主德不宣、恩澤不流。今吏既亡教訓於下」。

(28) 『漢書』卷五七下 司馬相如傳下「相如爲郎數歲、會唐蒙

使略通夜郎甕中、發巴蜀吏卒千人、郡又多爲發轉漕萬餘人、用軍與法誅其渠率、巴蜀民大驚恐。上聞之、乃遣相如責唐蒙等、因諭告巴蜀民以非上意。檄曰：……(中略)……夫不順者已誅、而爲善者未賞。故遣中郎將往賓之、發巴蜀之士各五百人以奉幣、衛使者不然。靡有兵革之事、戰鬪之患。今聞其

乃發軍與制、驚懼子弟、憂患長老、郡又擅爲轉粟運輸、皆非陛下之意也。當行者或亡逃自賊殺。亦非人臣之節也。夫邊郡之士、聞漢擊燧燧、皆擲弓而馳、荷兵而走、流汗相屬、惟恐居後。觸白刃、冒流矢、議不反顧、計不旋踵、人懷怒心、如報私讐。彼豈樂死惡生、非編列之民、而與巴蜀異主哉。計深慮遠、急國家之難、而樂盡人臣之道也。……(中略)……陛下

下使者有司之若彼、悼不肖愚民之如此、故遣信使、曉諭百姓以發卒之事、因數之以不忠死亡之罪、讓三老孝弟以不教誨之過。方今田時、重煩百姓。已親見近縣、恐遠所谿谷山澤之民不徧聞。檄到、亟下縣道、咸諭陛下之意。毋忽。

(29) 『漢書』卷二四上 食貨志上「過使教田太常三輔、大農置工巧奴與從事、爲作田器。二千石遵令長三老力田及里父老善田者受田器、學耕種養苗狀。民或苦少牛、亡以趨澤。故平都令光教過以人輓犂」。

(30) 『漢書』卷六 武帝紀元狩六年六月詔「今遣博士大等六人分循行天下、存問鰥寡廢疾、無以自振業者貸與之。諭三老孝弟以爲民師、舉獨行之君子、徵詣行在所」。

(31) 『禮記』禮運「四體既正、膚革充盈、人之肥也。父子篤、兄弟睦、夫婦和、家之肥也。大臣法、小臣廉、官職相序、君臣相正、國之肥也。天子以德爲車、以樂爲御、諸侯以禮相

與、大夫以法相序、士以信相考、百姓以睦相守、天下之肥也。是謂大順。大順者、所以養生送死事鬼神之常也」。文帝詔は民を對象とするものであるから具體的には「父子篤、兄弟睦、夫婦和」を指すであらう。

(32) 『漢書』卷四 文帝紀前二年九月條「詔曰、農天下之大本也。民所恃以生也。而民或不務本而事末。故生不遂。朕憂其然」とあり、「生不遂」の原因を農業に勤めないことに求めている。

(33) 『漢書』卷二四上 食貨志上。

(34) 『漢書』卷二 惠帝紀四年條「春正月、舉民孝弟力田者復其身」、同卷三 高后紀元年二月條「初置孝弟力田二千石者一人」註「師古曰、特置孝悌力田官而尊其秩、欲以勸厲天下、令各敦行務本」。

(35) 王昶『金石萃編』卷一八。

(36) 田叔傳褚少孫補には引用部分に續いて「坐上行出游共帳不辦、斥免。乃爲衛將軍舍人、與田仁會、俱爲舍人、居門下、同心相愛。此二人家貧、無錢用以事將軍家監。家監使養惡驢馬」とある。

(37) 嚴耕望前揭註(4)書 第六章 鄉官。

(38) 范滂傳には引用部分に續いて「資邊怒、捶書佐朱零。零仰曰、范滂清裁、猶以利刃齒腐朽。今日寧受笞死、而滂不可違。資乃止。郡中中人以下、莫不歸怨。乃指滂之所用以爲范黨」とある。この一件の後「郡中中人以下」が范滂に怨みを抱いたのは、范滂が李頌の任用に反對したためであるが、これは「郷里の棄つる所と爲る」者を含むであらう「郡中中人

以下」が今後李頌同様任用されないのであることが豫測されたからに他ならない。それ故、彼らは范滂に怨みを抱いたのである。もし屬吏の任用に際して郷里の輿論が第一の要件であれば、彼らが范滂を怨む理由が見出だせなくなる。また、郡太守宗資は、書佐朱零に「今日寧受笞死、而滂不可違」とまで言わしめた范滂の反對に遭ったからこそ李頌の任用を断念したのであり、もし范滂の反對がなければ當然任用していただであらう。

(39) 『春秋繁露』卷一六 止雨「雨太多、令縣邑以土日塞水瀆、絕道蓋井、禁婦人不得行入市、令縣鄉里皆掃社下。縣邑若丞令吏畜夫三人以上、祝一人、鄉番夫若吏三人以上、祝一人、里正父老三人以上、祝一人、皆齋三日、各衣時衣、具豚一黍鹽美酒、財足祭社」。

(40) 『漢書』卷二七中之下 五行志中之下「建昭五年、兗州刺史浩賞禁民私所自立社」補注「葉德輝曰、禮祭法、太社皇社國社侯社置社、皆王侯大夫自立及爲百姓立者、此官社也。民私立者、謂之私社」。

(41) 『漢書』卷八九 循吏龔遂傳「遂見齊俗奢侈、好末技、不田作、乃躬率以儉約、勸民務農桑、令口種一樹榆、百本蠶、五十本葱、一畦韭、家二母雞、五雞、民有帶持刀劍者、使賣劍買牛、賣刀買犢、曰、何爲帶牛佩犢。春夏不得不趨田畝、秋冬課收斂、益蕃果實溲災。勞來循行、郡中皆有畜積、吏民皆富實。獄訟止息」、同 召臣臣傳「信臣爲人勦力有方略、好爲民興利、務在富之。躬勤耕農、出入阡陌、止舍離鄉亭、稀有安居時。行視郡中水泉、開通溝瀆、起水門提閘、凡數十

處、以廣溉灌、歲歲增加、多至三萬頃。民得其利、畜積有餘。信臣爲民作均水約束、刻石立於田畔、以防分爭。禁止嫁娶送終奢靡、務出於儉約」。

(42) 『漢書』卷七六 張敞傳「京師瀆廢、長安市偷盜尤多、百買苦之。上以問敞、敞以爲可禁。敞既視事、求問長安父老。偷盜酋長數人、居皆溫厚、出從童騎、閭里以爲長者。敞皆召見責問、因貰其罪、把其宿負、令致諸偷以自贖。偷長曰、今一旦召詣府、恐諸偷驚駭。願一切受署。敞皆以爲吏、遣歸休。置酒、小偷悉來賀。且飲醉、偷長以赭汗其衣裾。吏坐里閭閱出者、汗赭輒收縛之、一日捕得數百人。窮治所犯、或一人百餘發、悉行法罰。由是桎鼓稀鳴、市無偷盜、天子嘉之」、同卷八九循吏黃霸傳「太守霸爲選擇良吏、分部宣布詔令、令民咸知上意。使郵亭鄉官皆畜雞豚、以贍饒寡貧窮者。然後爲條教、置父老師帥伍長、班行之於民間、勸以爲善防姦之意、及務耕桑、節用殖財、植樹畜養、去食穀馬、米鹽靡密。初若煩碎、然霸精力能推行之」。また、第三章第二節で民の教化の例として挙げた『漢書』卷七六 韓延壽傳、同卷八九循吏黃霸傳の例も父老長老が協力している。

(43) 「建初二年正月十五日、侍廷里父老儼祭尊于季主疏左巨等廿五人、共爲約束石券里治中、迺以永平十五年六月中、造起儼、斂錢共有六萬一千五百、買田八十二畝、儼中其有質次當給爲里父老者、共以客田借與、得收田上毛物穀實自給、即質下不中還田、轉與當爲父老者、傳後子孫、以爲常、其有物故、得傳後代戶者一人、即儼中皆質下不中父老、季巨等共假質田、它如約束。(以下略)」これについては黃士斌「河南

偃師縣發現漢代買田約束石券」(『文物』一九八二—二二)、寧可「關於漢侍廷里父老僱買田約束石券」(『文物』一九八二—二二)、邢義田「漢代的父老、僱與聚族里居」(『漢侍廷里父老僱買田約束石券』讀記—(一九八三年初出、同氏著『秦漢史論稿』東大圖書公司 所收)、柳山明「漢代結僱習俗考—石刻史料と郷里の秩序(一)—」(『島根大學法文學部紀要』文學科編九 一九八六年、山田勝芳「父老僱約束石券」と秦漢時代の父老」(一九八六年初出、同氏著『秦漢財政收入の研究』汲古書院 所收)、永田英正編『漢代石刻集成』(同朋舎出版 一九九四年)など参照。

(44) 『漢書』卷七六 韓延壽傳「入守左馮翊、滿歲稱職爲眞。歲餘、不肯出行縣。……(中略)……延壽不得已、行縣至高陵。民有昆弟相與訟田自言。延壽大傷之曰、幸得備位、爲郡表率、不能宣明教化、至令民有骨肉爭訟、既傷風化、重使賢長吏畜夫三老孝弟受其恥、咎在馮翊、當先退。是日移病不聽事。因入臥傳舍、閉閣思過。一縣莫知所爲。令丞畜夫三老亦皆自繫待罪。於是訟者宗族傳相責讓、此兩昆弟深自悔、皆自髡肉袒謝、願以田相移、終死不敢復爭」。

(45) 『北堂書鈔』卷七五 設官部二七太守中所引「謝承後漢書」宋度遷長沙太守。人多以乏衣食、產乳不舉。度切讓三老、禁民殺子。比年之間、養子者三千餘人、男女皆以宋爲名也」。

(46) 『北堂書鈔』卷五三 設官部五廷尉所引「謝承後漢書」「范延壽爲廷尉。燕趙聞、有三男子共娶一妻、生四子。後分子、縣丞相不能決、獻之於廷尉。延壽上言、男子貴信、婦人

貴貞。今三男一妻、比之禽獸、生子處母。於是以四子附母、尸男子棄於市、奏免郡太守令長、切讓三老無師道」。

(47) 『漢書』卷七二 王吉傳「吉意以爲、夫婦人倫大綱、夭壽之萌也。世俗嫁娶太早、未知爲人父母之道而有子。是以教化不明、而民多天。聘妻送女亡節、則貧人不及。故不娶子」とあり、「夫婦」「不娶子」が「爲人父母之道」として教化不明と關連づけられている。

(48) 『晉書』卷四五 任愷傳に「以淑行致稱、爲清平佳士」とあるが、佳士は『後漢書』傳六六 循吏仇覽傳註所引「謝承後漢書」に「於是元遂修孝道、後成佳士也」とある。佳士の價值觀にそれほど變化が無いとすれば、淑行は修孝道とおよそ同類の意味であり、大順ともおよそ同様の意味となる。

(49) 年は『呂氏春秋』下賢篇註に「年、齒也」といい、齒とは年齢のことであるが、『禮記』祭義註に「齒者、謂以年次立若坐」とあるように、齒はまた年齢の順に並ぶことをいう。

(50) 板野長八「孝經の成立」(『史學雜誌』六四—三・四 一九五五年)、渡邊信一郎「孝經の制作とその背景」(一九八六年初出)、同「孝經の國家論」(一九八七年初出 共に同氏著『中國古代國家の思想構造—專制國家とイデオロギー—』校倉書房)に、「孝經」の國家論—秦漢時代の國家とイデオロギー—と改題再録。

(51) 『漢書』卷七 昭帝紀始元五年六月條「詔曰、朕以眇身獲保宗廟、戰戰栗栗、夙興夜寐、修古帝王之事、通保傳傳孝經論語尙書、未云有明」、同卷八 宣帝紀元平元年七月條「光奏議曰、禮、人道親親故尊祖。尊祖故敬宗。大宗母祠、擇支

子孫賢者爲嗣。孝武皇帝曾孫病已、有招掖庭養視、至今年十八、師受詩論語孝經、操行節儉、慈仁愛人。可以嗣孝昭皇帝後、奉承祖宗、子萬姓」、同卷七一「疏廣傳「在位五歲、皇太子（元帝）年十二、通論語孝經」。

(52) 『漢書』卷七六 韓延壽傳「延壽嘗出、臨上車、騎吏一人後至。敕功曹議罰白。還至府門、門卒當車、顧有所言。延壽止車問之。卒曰、孝經曰、資於事父以事君而敬同、故母取其愛而君取其敬。兼之者父也。今且明府早駕、久駐未出。騎吏父來至府門、不敢入。騎吏聞之、趨走出謁、適會明府登車。以敬父而見罰、得毋虧大化乎。延壽舉手與中曰、微子、太守不自知過。歸舍、召見門卒。卒本諸生、聞延壽賢、無因自達、故代卒。延壽遂待用之。」故諸生の門卒が「孝經」を引用しているが、諸生とは學官の子弟のことであり（嚴耕望前掲註(4)書 第七章 郡縣學官）、學官における「孝經」の講義の實施が知られる。

(53) 『漢書』卷一二 平帝紀元始三年條「夏、安漢公奏車服制度、吏民養生、送終、嫁娶、奴婢、田宅、器械之品。立官稷及學官。郡國曰學、縣道曰侯國曰校。校學置經師一人。鄉曰序、聚曰序。序序置孝經師一人」。

(54) 『後漢書』傳五二 荀爽傳「故漢制使天下誦孝經、選吏舉孝廉」。

(55) 『後漢書』傳六九上 儒林列傳上「自期門羽林之士、悉令通孝經章句」、『後漢紀』卷一四 和帝紀下永元一五年條「是時、廣陵人王渙爲洛陽令、治有異迹。初、渙遊俠尙氣、晚節好儒術。爲治修名責實、抑強扶弱、并官職。吏輒兼書佐、小

史無事、皆令讀孝經」。

(56) 板野長八前掲「孝經の成立」。

(57) 西嶋定生「中國古代帝國の形成と構造」（東京大學出版會一九六一年）第四章第五節にもこの指摘がある。

(58) 『漢書』卷七六 韓延壽傳「延壽爲吏、上禮儀、好古教化、所至必聘其賢士、以禮待用、廣謀議、納諫爭、舉行喪讓財、表孝弟有行、修治學官、春秋鄉射、陳鍾鼓管弦、盛升降揖讓、及都試講武、設斧鉞旌旗、習射御之事」。

(59) 第三節本文所引「後漢紀」參照。

(60) 『後漢書』傳三三 何敞傳「歲餘、遷汝南太守。敞疾文俗吏以苛刻求當時名譽、故在職以寬和爲政。立春日、常召督郵還府、分遣儒術大吏案行屬縣、顯孝悌有義行者。及舉冤獄、以春秋義斷之。是以郡中無怨聲、百姓化其恩禮」。

(61) 『後漢紀』卷二三 靈帝紀上建寧二年條「元卒爲孝子、鄉邑所稱。縣表其閭、丞掾致禮」。

(62) 『西京雜記』卷五 「會稽人顧翱、少失父、事母至孝、母好食雕胡飯、常帥子女躬自採擷、還家。導水鑿川、自種供養、每有贏儲。家亦近太湖。湖中後自生雕胡、無復餘草、蟲鳥不敢至焉遂。得以爲養。郡縣表其閭舍」。

(63) 『續漢書』百官志五「本注曰、凡郡國皆掌治民進賢勸功決訟檢姦。常以春行所主縣、勸民農桑、振救乏絕」。

(64) 『漢書』卷八九 循吏文翁傳「每出行縣、益從學官諸生明經飭行者與俱、使傳教令、出入閭閻。縣邑吏民見而榮之」。

(65) 『漢書』卷六七 梅福傳「梅福、字子真、九江壽春人也。少學長安、明尙書穀梁春秋、爲郡文學」、同卷七一 雋不疑

傳「傳不疑、字曼倩、勃海人也。治春秋、爲郡文學、進退必以禮、名聞州郡」。

- (66) 『北堂書鈔』原文は「魯相」を「晉相」、「三老」を「王老」に作るが、周天游『八家後漢書輯注』（上海古籍出版社一九八六年）により改む。

(67) 註(44)所引『漢書』卷七六 韓延壽傳。

- (68) 『漢書』卷九〇 酷吏傳「乃使光祿大夫范昆、諸部都尉及故九卿張德等、衣繡衣持節虎符發兵、以興擊、斬首大部或至萬餘級、及以法誅通行飲食、坐相連郡、甚者數千人」。

(69) 『漢書』卷七一 于定國傳には「始定國父于公、其閭門壞。父老方共治之。于公謂曰、少高大閭門、令容駟馬高蓋車、我治獄多陰德、未嘗有所冤、子孫必有興者」とあり、冤罪無きことを陰德という。同傳の東海孝婦のように冤罪か否かを問わず罰すれば解決とされる中で、于公の如く冤罪無きことは人々に徳とされたのであろう。同様に多く冤罪の者を含むであろう萬餘人を王賀が罪せず許したことも、人々に徳とされたことであらう。この「徳之」を三老となった後の王

賀に對する評價とも解釋し得るが、三老は縣毎に置かれるのであり、郡全體から徳とされたとは考へ難い。

- (70) 沈年潤「釋東漢三老趙掾碑」(『文物』一九六四—五)、永田英正編前掲『漢代石刻集成』。

(71) 『後漢書』傳三五 張酺傳註「漢官儀曰、督郵功曹、郡之極位」。

(72) 『後漢書』傳一五 魯丕傳。

(73) 『後漢書』傳一四 馬嚴傳。

(74) 『漢書』卷五四 蘇武傳「以武者節老臣、令朝朔望號稱祭酒、甚優寵之」、同卷六〇 杜延年傳「延年視事三歲、以老病乞骸骨。天子優之、使光祿大夫持節、賜延年黃金百斤牛酒、加致醫藥」、同卷六六 車千秋傳「初、千秋年老、上優之、朝見得乘小車、入宮殿中。故因號曰車丞相」。

(75) 『漢書』卷六七 云敞傳には「初章爲當世名儒、教授尤盛。弟子千餘人。莽以爲惡人黨。皆當禁固、不得仕宦。門人盡更名他師」とあり、弟子は仕宦が目的であったことがわかる。

THE EVOLUTION OF THE SANLAO 三老 SYSTEM AND THE ENLIGHTENMENT POLICY 教化 DURING THE HAN DYNASTY

TAKATORI Yuji

Previous studies of the Sanlao system during the Han period have not focused on the fact that the post of Sanlao was established by the central government to fulfill specific functions. In this paper, I analyze the Sanlao system with particular emphasis on the facts that:

1, The purpose of the establishment of the Sanlao system in the early Han period was to requisition both food and troops. This was accomplished via the incorporation of Fulao 父老, or leaders of local societies, into the Sanlao system as official delegates of these societies.

2, Under the reign of Wendi 文帝, those who held the positions of Sanlao as “leaders of the people” 衆民之師 were expected by the central government to ensure that the population under their control comply and cooperate with government policies.

3, In the latter half of the Former Han period, with the enactment of the enlightenment policy of instructing the people Xiaoti 孝悌 by means of the Xiaojing 孝經, as a “respected elder” (Zunian 尊年) those chosen for the position of Sanlao were expected to both instruct the people in government policy and to serve as distinguished representatives of this policy.

A STUDY OF DISTINCTION IN MILITARY SERVICE AND THE CONFERRAL OF TITLED IN THE HAN PERIOD

FUJITA Takao

During the Han period, it was common to bestow titles as a reward for distinction in military service. Recently, wooden strips have been discovered in Han-period tombs at Shangsunjiazhai 上孫家寨 in Qinghai